看護業務の効率化　先進事例アワード2020

最優秀賞

株式会社トラントユイット

訪問看護ステーション

フレンズ

訪問看護におけるエコーによるアセスメント導入と ICTを使った医師との連携

プレゼン動画視聴はこちら ▶

施設概要

世のため、人のため、最後は自分のため

訪問看護ステーション
フレンズ

株式会社トラントユイット

訪問看護ステーションフレンズ

所在地　北海道函館市

従業員数　20名

うち看護職員数：20名(2020年12月1日現在)

取組の背景と目的

背景　看護師による従来のフィジカルアセスメントの限界

- 訪問看護師による従来の問診、視診、聴診、触診、打診のみでは、素早く正確なフィジカルアセスメントに限界があり、超音波検査(以下：エコー)による可視化が必要。
- 特に在宅療養者の「食べる」「出す」「寝る」を支援するために、嚥下・排泄・褥瘡のアセスメントにエコーの導入が必要。

遠隔地域におけるタイムリーな情報共有が課題

- エコー画像の読影には高いスキルを要し、画像のアセスメントに基づく早期介入を行うためには、医師等とのタイムリーな画像情報の共有が必要。
- 北海道という地域特性もあり、日常的に片道100Km以上の遠隔地への訪問を行うなかで、エコー画像を持って医師への説明に向かうことは非効率的であった。
- 地域医療情報ネットワークシステム「道南Medika(メディカ)」がすでに稼働しており、それを利用してリアルタイムな情報の共有を考えた。

取組の背景と目的

目的

- **訪問看護師による携帯型エコーを用いたアセスメントとICT利用による主治医とのタイムリーな画像共有により、在宅療養者にタイムリーで適切なケアを行う**
- **本取組を通じて訪問看護業務の効率化をめざす**

道南Medikaとは

- 2008年4月から北海道・道南地域医療連携協議会が運営する、クラウドを利用した道南圏の「地域医療連携ネットワークシステム」。
- 地域の参加医療施設間をインターネットで接続し、患者の投薬歴や検査データ、手術記録、画像データなどを複数の医療機関が共有し、検査の重複をなくすなど患者の負担軽減を目指すもので、道南圏の全訪問看護施設が参加している。
- 受診先が複数の医療機関にまたがる患者へ、迅速・的確な処置を行うことを可能にしている。

取組の内容

取組の経緯

■技術研修

2019年 4月	**携帯型エコーを レンタルにて1台導入**	● 導入当初は所長だけでエコーに取り組み始めたが、スタッフに勉強会で症例を共有したところ、訪問看護師全員から「自分もエコーを学んでアセスメントに使いたい」という声が上がる。 ● エコーでのアセスメントの必要性と有効性がスタッフに伝わった。
9月	**所長が エコーの指導者資格を取得**	● 所長が、一般社団法人次世代看護教育研究所のエコープログラムの「排泄ケアコース」「褥瘡ケアコース」「嚥下ケアコース」を修了。排泄ケアの指導者資格も取得。
2020年 4月	**携帯型エコーを2台購入**	● 膀胱や大腸などの深部組織を観察できるコンベックスプローブ、頸部や褥瘡部などの表在組織を観察できるリニアプローブの2台を購入。
11月	**スタッフが エコー技術を取得**	● eラーニングによりスタッフ11名が看護教育研究所で技術習得(OSCE) 研修にかかるコスト：1名36,000円(会社負担)。 ● スタッフ間で、エコー画像の読影会を定期的に実施。
現在	**実践**	● ほぼ毎日、携帯型エコーは何かしらの訪問看護に使用。

症例① 直腸便貯留の排便ケア

患者：87歳男性
病名：膀胱がん末期、膀胱内に腫瘍が目一杯大きくなっている状態、右水腎症、前立腺転移

令和２年７月：血尿の主訴で急性気病院受診、上記診断となる。
治療適応無しと診断されBSCの方向となる。入院中精神的不安となり、妻も自宅での最期をと希望され退院し自宅療養。

【経過】
ADLは徐々に低下していたが、排便はトイレで行っていた。
訪問時、4日以上排便がない状態であり、患者より肛門痛の訴えがあった。
訪問看護師がエコーを実施したところ、下行結腸と直腸に便貯留が認められたため「道南Medica」で画像を送り、主治医の判断を仰いだ。
主治医から「直腸のエコー画像から硬便が疑われ、さらに下行結腸に便貯留がみられることから、大腸内の便が停滞していると考えられる。滴便を実施してください」との指示を受け、すぐに摘便を実施した。
摘便により、ブルストル便性状スコア2点の硬便が多量に排出された。
エコー画像共有による正確でタイムリーな診断とケアがなければ、患者の排便は次回訪問時の7日後か、緊急訪問(往復1時間)となった可能性があった。

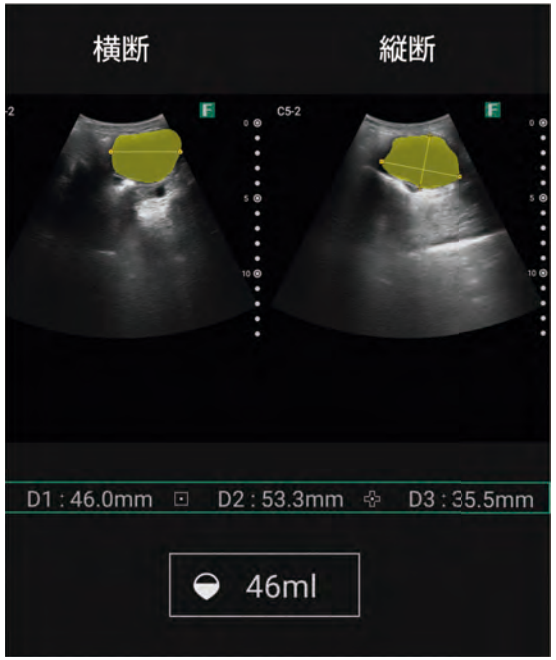
取組の内容

症例② 残尿量計測による早期多職種カンファレンス

患者：1歳女児
病名：トリソミー、心室中隔欠損、髄膜瘤op後経管栄養

・出生後よりVSD、髄膜瘤のopを行い9か月後自宅退院した。
・当ステーションから120キロ離れた地域で父母と3人暮らし。

【経過】
これまでは明らかな泌尿器系合併症は見られなかったが**、訪問時おむつへの自尿を確認直後にエコーのAI機能で尿量計測をしたところ20ml以上の残尿が確認された。**
続けて重症度を確認するため腎臓をエコーで観察すると、水腎症の所見も見られた。
「道南Medica」を通して画像と所見を医師に報告したところ、主治医より「大学病院で精密検査を受診すること」「自宅で定期的に導尿を行うこと」とタイムリーに指示を受けた。
「道南Medica」は医師だけでなく、関連する多職種にも情報共有ができるので、**エコー画像でわかりやすく情報が提供されたことで、ケースワーカーや小児科医も加えた多職種カンファレンスの早期開催につながった。**



取組の成果・効果

■ 成果：**実現した「看護業務の効率化」**

1 業務量の削減、時間の短縮

- 所見の可視化・ICT利用による多職種でのリアルタイムの情報共有により、正確な観察とケア選択が可能になり、観察、アセスメント、ケア計画立案にかかる時間が短縮した。
- 適切なケアが実施できることで、不要なケアの削減や、緊急訪問や電話相談の時間・回数の減少につながった。
- 1回の訪問にかかる時間の短縮により、1回の訪問時に実施出来るケアが増え、また、他の利用者への訪問も可能になった。

2 看護職の身体的負担・精神的負担の軽減

- 所見を可視化できることで判断に確信が持てるようになり、また、利用者へ必要な処置のみができるようになったことが、看護師の身体的・精神的な負担軽減につながっている。

例) 従来行ってきた直腸指診の行為自体が不要となり、
看護師、利用者の双方にとって精神的な負担が軽減された。

取組の成果・効果

■ 効果：**看護業務効率化によって「もたらされた効果」**

1 利用者の満足度の向上

- 今までの訪問看護では症状を確認後、医師に診察を依頼したのち患者に介入していたが、エコー画像をネットワークシステム上で医師に確認してもらうことで、リアルタイムの指示を受けられるようになり、その結果、利用者に必要なケアを早期介入できるようになった。
- 特に、利用者とかかりつけ医が100Km以上離れているような地域では、画像を使った正確なアセスメントや、ICTを通じてすぐに医師の判断を得られることで、利用者が、離れていても医療者とつながっているといった安心感・満足感を得られているように思う。
- 利用者だけでなく、その家族も画像を見られるので、症状説明に対し理解・納得しやすくなる。
- エコーは非侵襲的であり、また、不要なケアを実施せずに済むようになったことは、患者の安楽につながっている。

2 看護職の満足度の向上

- 従来のアセスメントに加え、画像を使ったアセスメントを取り入れることで、自信を持ってケアが行えるようになった。専門性の高い訪問看護が実施できていると感じる。
- エコーを使い続けることで、画像の読影技術が向上している。

取組の成果・効果

■ 効果：**看護業務効率化によって「もたらされた効果」**

3 チーム連携の向上

- 言語聴覚士、理学療法士、ケアマネージャー、ヘルパーなどのエコーを使用しない職種とも、画像を見ながらのディスカッションができるようになった。
- 画像を見ることで介護職も体内の状態をイメージしやすくなり、日々の介護の中で在宅療養者の身体のアセスメントに関心を持って働けるようになっている。

4 他職種(医師)の満足度向上

- これまでエコーを使用していなかった小児科医からもエコーを学びたいという声が出ている。
- 病院に勤務する総合内科医からは「自分の患者が在宅にいてもエコーで見てもらえて安心。心配な画像があればすぐ見せてほしい」と言われ、訪問看護師がエコーを使うことで、安心感が得られたという声が聞かれた。

今後の展望

- 訪問看護師がエコーを使うことで、さらに利用者のアセスメントを正確かつ素早く実施でき、専門性のある訪問看護が実践できると良い。
- エコー以外のデバイスやオンライン診療等、利用者にとってプラスになるものを積極的に取り入れていきたい。
- 訪問看護においてエコーを活用することが、診療報酬上で評価されることを期待している。

Point!

これからICT化を進める場合

- ✓ 携帯型エコーを導入する上でネックとなるのは携帯型エコー機器の料金、研修のための料金など、コストであるが、利用者への素早く正確なアセスメント、利用者の負担軽減、医師への症状説明の具体性の向上、ケア時間の短縮、看護師のスキルアップ、遠隔地への往復時間の短縮など、総合的には携帯型エコー導入によるメリットは大きいと考える。
  (携帯型エコーのレンタルには、1台あたり月3～4万円のレンタル量がかかるため、思い切って購入した。2台で約200万円超の経費がかかっている)
- ✓ 見えないものが“見える”ということは、医療者だけでなく、利用者にとっても安心をもたらし、病状説明等においても効果的である。